骨組みは次の諸点より成り立っている。第一に現代世界における米帝のベトナム戦争の危機とドル危機とがさし迫んでいる構造を現象論的に眺めて、戦後帝国主義世界体制のこのような根底的動揺を自動崩壊的なものにまで極限化して把えること。第二に日本帝国主義国家权力の強化を「警察国家への転換」とか「核動隊国家」などと把えること。この背後には帝国主義国家のツイタテのように理解しているのである。以上の情勢判断にたって第三に、日共決戦の戦術を「核動隊せん滅」にしぼり上げていること。すなわち①「肉弾」にかえ、死ぬことを善でとする。英雄的精神」つまり〝特攻精神〟を同盟の精神的・実存的支柱とすること②核動隊のせん滅・反動的私有財産の没収などの大衆的テロリズムの煽動。

こうしてオ四に、その組織論はゆきつくところ「ボルシェビキは一九〇五年革命で一時は解体したな(?)」と叫び魅了た。わが中核派も民家に名を記憶されるならば組織は消滅してもよいという暴談的組織論となる。

ここには、「武装蜂起」を言辞で弄ぶ集団の思想的頽廃の極地がある。

そもそも日本国家权力の暴力装置の核心の強化は量的にして「警察国家」になどと規定するのは、国家の実体把握の一部分や、その機能の一面をとり出して本質規定にスリカエたりする誤謬であり、これがオ一の誤謬である。

しかも、これと結びついているオニの誤謬は、今日の日本の階級情勢を安直に、一九〇五年の口シアと類推し両者の民定経済力差の違いすら吹っとばし、しかも現時点の日本の階級情勢を一九〇五年とはるかえて「革命前夜」にたとすることである。そしてレーニンの权威を借りて「パルチザン戦等の戦術」などを直接導入するなど、初歩的手が社会やマターリニストによって書き続けられてきた今日の日本の情セに人工的に持ち込んだことである。

さらにオ三に、そこではレーニン革命論の批判的継承を全く投げおき、レーニン全集の言葉が絶対化されているにすぎないことである。一九〇五年のレーニン革命論の資格は二段階革命論(労農民主独裁論)であり、したがってそこではプロレタリア革命の具体的言動たるメンイエトの組織化が抜け落ちていた。

しかも、オ四に、彼らの「内戦の思想」や暴談組織論の提唱に示されるものは「根性ちくり」をおぎなう政治主義的発想にすぎず、その基底にあるのは下部を「捨石」として核武装七、武装隊の壁を破らんとするものでしかない。

かかるタクロ＝中核派の学生戦線からの、とりわけその最後のヨ城たる日大からの最後的放逐を我々は11月労働者の約結代の中で成し遂げていかねばならない。

B 学生解放戦線＝ML同盟の「再出決戦」論批判

(1) ML同盟の過去と現在

そもそも、ML同盟の前身は、マント＝社学同の一分派としてあった社学同マルクス・レーニン主義派(共産同には始どML派系の活動家は存在しなかったらしく分派は結成されなかった、ただし社学同ML派は存在しており、これは極めて旧マル戦派(マルクス主義戦派)に近似した分派であった。マル戦派との対立点は、特に日本帝国主義の規定をめぐってであり、その他の基本路線上では始ど明瞭な対立点はなかった様である。

ところが、ML派は日韓闘争の過程において序々に毛沢東主義への傾斜をみせ始め、一九六七年春における社学同ML派合宿において、彼らのかこっている活動家を集めてかき集め、遅ればせのマルクス・レーニン主義の不断革命論と革命発展段階論を討論資料としつつ、毛沢東路線への純化を決意していったのである。

この「転換」そのものは極めてなし崩し的なものであって、この間一貫して彼らがその終始を回避してきたことにホされる様に、全く破綻模糊としているが、基本的にはマル戦派的な政治力学主義的「政治過程論」を更に軍事力学主義的に純化させ、毛沢東の軍事路線＝「人民戦争」方式ーそれも林彪的に改ざんされたーをとり入れていったのであろう。彼らが未だ「プロレタリア权力」とか「プロレタリア軍权力」を「創出」すると語っている如く、彼らは戦略においても毛沢東主義へ転落してしまったわけではなく、マントキ義的立場からの毛沢東への接近というべきであろう。

ちなみに彼らは、この六七年春の合宿で自己を毛沢東主義者として位置づけたところが、六七・一〇、八を北京放送が「反米愛国の斗い」と賛美するや、「〝愛国〟とはあまりにも色彩的で甘いか?」と下部に深刻な動揺を生みだし、ほぼ半年近く彼らの斗いをも組みえないほどの消耗